

エドワード・ハーバート『自叙伝』 —— (1)「先祖と親兄弟の肖像そして誕生譚」——

山根正弘 訳

[訳者による前口上] 十七世紀イギリスを代表する宗教詩人ジョージ・ハーバートの兄として知られるエドワード・ハーバートは、万能を目指したルネサンスの人物であった。若くして結婚したあと妻子を残してパリに武者修行に出かけ、戻ってくると今度は義勇兵として低地帯の独立戦争に加担するなど血気盛んな武人としての一面を有するとともに、独創的な哲学や浩瀚な歴史の書を公刊しただけではなく、ラテン語の韻文や英詩それにリュート音楽にも精通した文人でもあった。国王ジェームズ一世の治下、駐仏特命大使としてパリに赴任。その後、男爵に叙せられ、チャーベリーのハーバート卿の称号を得た。齢六十の坂を越えた頃、人生を振り返りその波乱に満ちた半生を著したのが本書である。

本邦初となる翻訳の底本には、Edward Herbert, *The Autobiography of Edward, Lord Herbert of Cherbury*, ed. Sidney Lee, 2nd edn. (London: Routledge, 1906) を用いた。異本として、*The Life of Lord Herbert of Cherbury*, ed. J.M. Shuttleworth (London: Oxford UP, 1976) を参照した。本文中のイタリック体は、訳文では「 」で示した。なお、本文中の()は著者による注であり、[]は訳者による短い説明である。さらに解説が必要と思われる箇所には、アラビア数字に括弧を付し、後注とした。

信じて疑わないことがある。これまでご先祖様がその生涯を書きとめ我ら子孫に残してくれていれば、ご先祖様たちは我らと生まれながらに持つ気質や性癖が同じで、おそらくあまり異なった人生を送ることがなく、ご先祖様のことを知るに足る諸の文書は、我ら子孫の教育に役立ったに違いない。それとともに父や祖父それに曾祖父が子孫のために披瀝した観察にもとづく所見があれば、世間の規則や範例よりもさらにもっと人生の指針として役立つことは間違いない。というのも、世間の規則や範例は、我が一族にことごとく当てはまるとは限らないから。したがって、ご先祖様が生涯にわたり私人であり、そこに子供たちや使用人や借地人それに親戚縁者や近隣の者に接するのに足る教訓しか見出せなくても、あるいは、広く世の中に出てその人生が大学や法律の研究および宮廷や軍隊に捧げられたとしても、いずれにしても跡取りたちは他の如何なるものにもまして恩恵に浴したに違いない。こういう訳で、自身の生涯を子孫に伝えるのが相応しいと思った。これらの話は、私自身を一番よく表していて、子孫にも役立つと思われる。人生を語るさい、真摯な態度で嘘偽りなく記すことを明言する。なぜなら、これまでも他人を騙し嘘をつくのうそいつわを潔しとせず、しかも身近

な身内に語る責務から嘘は憚るというもの。我が齢は六十の坂を越え、これが筆を執るひとつの理由であるなら、これまでの行状を振り返り、その善し悪しを吟味するのもよからう。しかもこれまでに犯した過誤を改め、神と和解し、神のご慈悲と憐みのお蔭で、良心や美徳それに名誉の鑑に照らし、為してきたことに自ら慰めを得るという目的もある。だが、自ら人生の総決算をするまえに、ご先祖様に関して、その記録が何らかの信頼に足る方法で私の許に伝わっており、先に幾分か述べる必要があろう。けれど、あまり多くは語れない。なぜかという、祖父が亡くなったのは私がようやく八歳になったときのことであり、それから四年するかしないうちに父が他界したからである。しかも、残りの人生を実家から離れて暮らしており、ご先祖様の行状が余すところなく私の耳に届いているとは限らず、それらすべてを語ることなど到底できない。したがって、ご先祖様の生涯のうち、よく知られていて疑いようなない場面に限って事実を述べるにとどめよう。

父は郷士リチャード・ハーバート、祖父は郷士エドワード・ハーバート、曾祖父はサー・リチャード・ハーバート士爵である。曾祖父は、モンマスシア州〔ウェールズ南東部〕はコールブルックのサー・リチャード・ハーバートの次三男^{じさんなん}のひとりであったが、語るネタがあまりない。まず、父について思い出せることといえば、父方全員に当てはまるようだが、黒髪で顎髭を蓄え、男らしくて少し近寄りがたい風貌をしていたことだ。しかしそれでいて男前で四肢がよく引き締まっており、とても勇敢であった。それを示す武勇伝が残っている。本来であれば法廷に出頭するのを拒む輩^{やから}を捕らえていたはずだが、まさにその時、父はスラネルヴァルの教会墓地で残虐非道にも大勢の者に襲われた。多勢に無勢で襲撃者すべてより身を護るに際して、ジョン・アブ・ハウウェル・コルベットただひとりの助っ人とともに敵対者どもを追いかけた。するとある悪漢が背後に迫り寄り、大勢の肩越しに^{なた}鉦で後頭部を斬りつけた。父は抗う術もなく地面に倒れ込んだ。頭には「脳軟膜」まで切れ込みが入っていたが、意識を取り戻すと、敵対者が逃げ去るのを見届け、スリッシンの館まで歩いて帰った。快復したあと、その人物の教唆で悪事が行なわれたとおぼしき一族^{おさ}の長に、一騎打ちの果たし状を叩きつけた。しかし、首謀者は自分がやらせた訳ではないと容疑を一貫して否認、誓ってそうではないと身の証をたてると申し出た。その間、父に傷を負わせた張本人はアイルランドに逃亡、二度と戻ってくることはなかった。父はその手の事件でさらに訴える気はなかった。先述の刀傷にもかかわらず健康と体力とを取り戻し、田舎暮らしで従来どおり鍛錬を積み、何人もの子供を儲けた。父は祖父もかつて任官した州副統監や治安判事それに「州首席治安判事」に就任した。それらの要職にある時の高潔さについては、今でも記憶に新しいが、敵でさえ父に法廷を開くよう求め、敵もあらゆる機会に正義を見出したという。父の学識については、母国語だけではなくラテン語にも通じ、さらに歴史によく精通していた。

祖父の人生は波瀾万丈であった。始まりは宮廷で、そこで資産の大半を使い果たすと軍人となり、フランスのサン・クエンティン包囲〔一五五七年〕のとき剣で身を立てた。そして国王エドワード六世と女王メアリーの治世に勃発した北方の合戦や謀反のとき、首尾よく役目を果たし、昇進して帰ってきたばかりか、莫大な富と財産を築いた。それを元手に不動産を手に入れたが、そのほとんどすべてに近い土地が私にまで伝わっている。曾祖母レデイ・アン・ハーバートの名で作成された証文から明らかで、皆様にもご覧いただけるが、曾祖母が購入したなにがしかの土地も私に残されているのも事実だ。でも、実はもっとあったが、祖父が若気の至りで適正価格より安く売却したのだった。祖父の許しがあれば、父が買い戻していたはずだ。祖父は当時、無法者や泥棒にとって不倶戴天の敵と怖れられた。奴らはモントゴメリーシア州〔ウェールズの中中部〕の山々で徒党を組んで強盗を働き、その制圧のため祖父が昼夜兼行して奴らが集う場所に出向いた。様々に詳しい話を聞いているが、ただひとつを述べるにとどめる。ある無法者たちがスランディナムの丘陵に店を構える酒場にたむろしていた。祖父は使用人数名を連れて奴らを捕らえるべく乗り込んだところ、山賊の頭が祖父に向けて矢を放つと、馬の鞍頭に突き刺さった。それで祖父は剣を手にとり、頭のところに駆け寄り、奴を虜にした。先述の矢を示し、己が所業を見させた。それに対し奴は知恵を絞って、もっと威力のある弓を家に置いてきて残念だ。それならおまえの身体にぶち込めたのと言うのが関の山で、裁判にかけられ報いを受けた。祖父の権力は地元では絶大で、今ではモントゴメリーシア州で名門となっている数々の氏族は、その先祖が祖父に仕え出世した。祖父はまた人を歓待することに大きな喜びを感じた。食事の度に手に入る最高の食べ物をこれまた長い食卓に並べて二度も準備させたほどで、名家というに相応しい。当時地元で鳥が飛び立つ姿を目にすれば、鳥よ、どこへ飛ぼうとも降り立つ先はブラック・ホール、とよく言われたものだった。平屋だが広大な敷地で、祖父が一代で築き上げた。それより前は、曾祖父と祖父はモントゴメリー城で暮らしていた。普請に多大な費用を投じたにもかかわらず、子供たちを立派に育て上げた。娘たちは盟友にして地元の名士に嫁がせ、次三男も大学に行かせた。そのひとりマシューは学業を終えると低地帯の戦に出かけ、しばらくそこで過ごした。その後、戻ってきてからはドルギオグの田舎に引っ込み、祖父より譲り受けた屋敷で安楽な生活を送った。もうひとりの息子チャールズも、同様に低地帯でしばらく過ごしたあと帰国し、家督を相続する権利を有する女性と結婚した。その長男サー・エドワード・ハーバート士爵は司法長官である。さらにもうひとりの息子ジョージはオクスフォードのニュー・コレッジ出身で、とても学識があり敬虔だったが、人生の半ばに水腫病で命を落とした。祖父は先述の如く、ことあるごとに散財をしたが、大量の土地を購入した。それも不正に、あるいは、情け容赦なく取得したことはない。このことは、私が何度も担当の代官を通じて、あくどい手口を使って、あるい

は、極悪非道に土地を譲渡させられた者があれば、代金の一部を払って示談にするか、あるいは元の持ち主に返却する、とのお触れを広く国中に出したが、未だかつてこの手の訴えをする者は一人たりともない、という事実からも裏書きされよう。祖父は八十歳ぐらいで亡くなり、モントゴメリー教会に埋葬された。父には立派な墓が建立されたが、祖父を偲ぶ墓はない。

曾祖父サー・リチャード・ハーバートは、国王ヘンリー八世の御代、王室家政長官であった。北ウェールズ、東ウェールズそしてカーディガンシア州〔ウェールズ西部〕の辺境領主となり、軍法で罪人を処刑する権限を与えられた。その権限を行使する際、曾祖父は大岡裁きとして名高く、そのことはホワイト・ホールの文書庫に保管された記録からも明らかである。曾祖父の事跡の一部について、自著『ヘンリー八世史』で言及したことがある。それ以外のことについては、あまり言うべき事がないものの、反逆者や泥棒それに無法者を厳しく取り締まったが、それでいて公正で情けのある裁定であった。公平性を欠くか残忍な人物にそのような権限が委ねられたら、一財産を為したであろう。だが、曾祖父はその父から譲り受けたもの以外は、ほとんど何も子孫には残さなかった。曾祖父は同じくモントゴメリー教会に永眠している。内陣にある二つの墓のうち、奥のものが曾祖父のために建立された墓である。

曾々祖父コールブルックのサー・リチャード・ハーバートは比類なき英雄で、（〔エドワード・〕ホールや〔リチャード・〕グラフトンの史書にあるとおり）ただひとり戦^{いくさ}斧を手に持ち、二度も荒くれの北方軍の間に割って入り致命傷を負うことなく帰還した。その勇姿は、〔中世のロマンスに謳われる〕騎士道の華ガリアのアマデイスよりも立派であったという。先の戦〔バラ戦争の一環〕が行なわれたバンベリー、つまりエッジコート^{エッジコート}の戦場における武勇伝はさておき、信頼できる筋から得た曾々祖父にまつわる言い伝えを述べよう。そのひとつはこうだ。当該のサー・リチャード・ハーバートが兄のペンブルック伯ウィリアムと一緒に仕官して北ウェールズの謀反を鎮圧しに出かけた際、メリオネスシア州〔ウェールズ北西部〕のハーレフに籠城する反逆者の主要人物を攻囲した。この城を守る武将は、かつて対仏戦争で功を為した軍人であった。その武将は包囲されると、次のように豪語した。フランスで長らく城を守り続け、そのお蔭でウェールズの老婦人たちの間で噂となったものだ。またこの度も、このハーレフ城を長らく守れるのであれば、フランスの老婦人たちの間で噂となろうと。実際、その城は兵糧責め以外では難攻不落であり、サー・リチャード・ハーバートはやむを得ず和議によって彼を捕らえた。投降する条件は命の保証であった。合意に達し、武将をイギリス国王エドワード四世の御前に連れ出した。それというのも、命乞いのためその武将が長らく堅持していた要衝たる根城を明け渡したのだから、王は恩赦を与えるに相違ないと思ったからだ。しかし、陛下がサー・リチャード・ハーバートに伝えた内容は、朕には如何なる者にも恩赦を与える権限は賦与され

ておらず、したがって陳情が終わると武将を評定所に無事に送り届けるように、というものであった。サー・リチャード・ハーバートの返答はこうだ。まだ武将のために最善を尽くしておりません。よって、ふたつのうちどちらか一方をお選び下さいますよう、どうかお願い奉る。つまり、武将を元の城に連れ戻し別の人物に事を一からやり直させるか、あるいは、その意思が陛下にないのであれば、武将の代わりに私の命をお取り下さいと。サー・リチャード・ハーバートが武将の命を救うのにできる精一杯の尽力の証左であった。陛下は、これほどまで切に懇願されて、やむなく武将の命をサー・リチャード・ハーバートに預けたが、それと同時に、この度の奉公に対する報酬は帳消しにした。もうひとつの逸話はこうだ。サー・リチャード・ハーバートが兄のペンブルック伯と「ウェールズ北西部の」アングルシー〔島〕に赴き、そこで数々の殺戮や悪事を働いた七兄弟を捕らえた際、ペンブルック伯は邪悪な一族を根絶やしにするのが適当であると考え、全員を縛り首にするよう命じた。すると奴らの母親がペンブルック伯のもとを訪れひざまずくと、先述の息子たちのうちふたり、あるいは、せめてひとりだけでも助けてくれませんかと命乞いをするとともに、残りの者は罰を受け晒し首になっても仕方ありませんと明言した。その懇願をサー・リチャード・ハーバートも後押ししたが、伯爵は全員等しく罪があり一蓮托生との判断を変えず、処刑を命じた。そのことで母親はひどく悲しみ、(逸話の語るところによれば)一対の羊毛製〔一説には木製。当時庶民が用いていたという。woollen / wooden の誤りか〕の数珠をそれぞれの腕にかけたまま跪き、次に戦う戦場で最悪の災難が降りかかりますようにと、伯爵に呪いをかけた。この後、伯爵は弟のサー・リチャード・ハーバートと先述のエッジコート of 戦場に赴いた。そこで戦列を整えると、弟が悲しげに、あるいは物思いに耽るかのように、最前列で戦斧に寄り掛かっていた。それを見た伯爵は、「弟よ、お前の巨体（というのも軍隊のだれより頭ひとつ頭抜けていた）は憂鬱症に冒され、でくの坊になってしまったのか。あるいは、このように戦斧に寄り掛かるほど進軍に疲れたのか」と詰め寄った。サー・リチャード・ハーバートが答えて言うには、「そのどちらでもありません。じきにその証がご覧頂けましょう。私はただ、羊毛製の数珠を持った婦人がかけた呪いが兄に災いするのではないかと、兄の身を案じるばかりであります。」このサー・リチャード・ハーバートは、〔南ウェールズの〕アバガヴェニーで当時としては豪華な墓に埋葬され、その墓は今でも残っている。その一方、兄のペンブルック伯はティンタン・アベイ〔グウェント州、ワイ川のほとり〕に埋葬されたが、その墓は教会堂とともに今では全体が破損し廃墟となっている。このペンブルック伯には次三男がいて、そのうちのひとりに娘がいるが、彼女はウスター伯の長男と結婚した。〔当該の娘はエリザベスで、ペンブルック伯の長男の娘。結婚相手の男性も、ウスター伯の私生児であって嫡男ではない〕その人物はある一族の嫡男からラグランドの名城と年額数千ポンドを掠め取った。その一族の嫡男

とは、ペンブルック伯の次男〔実は、三男サー・ジョージ・ハーバート〕で、私が後に結婚することになる世嗣の娘を有するサン・ジュリアン家の先祖である。私の結婚話はしかるべきところである。このペンブルック伯とサー・リチャード・ハーバートの次三男が子孫を後世に残し、私自身と妻とが人として生を受け、両家が再統合されたことは、とてもめでたいことだ。さらに、前述の史書にあるとおり、あのペンブルック伯とサー・リチャード・ハーバートとが先述の戦でエドワード四世の大義名分のため〔王位継承を擁護して〕捕虜となったとき、弟の命を奪うなら、命乞いをせずとペンブルック伯が豪語したことは記憶にとどめ置くべきことだ。〔史実によると、エッジコート^①の戦で兄弟もろとも斬首された〕したがって、両家の統合ゆえに、子孫末代にわたり永劫に友誼と友愛の義務がある。というのも、このふたりの兄弟によって、^{ふんけい}刎頸の交わりという範例が示されたといえるから。

私の母はマグダレン・ニューポートといい、サー・リチャード・ニューポートとその妻マーガレットの娘である。祖母のマーガレットは、国王ヘンリー八世の御代、枢密院の顧問官のひとりで王の遺言執行者であったサー・トマス・ブルムリーの娘で家督を相続する権利を有していた。祖母マーガレットは夫に先立たれたあと、子孫のために儉約することを旨とし、毎日私的・公的な祈禱に倦まず弛まず献身的に励むなど、神への比類なき敬虔な信仰と子供たちへの愛情とを見事に体現した人物であった。しかも、（広大であった）地所を祖母の気持ち次第でだれにでも譲渡できたが、再婚もせず慎ましい暮らしを続け、娘たちすべてには十分な持参金を付けて近隣の名家に嫁がせたあと、土地と財産の管理をすべて長男のフランシスに委ねた。祖母はまた、長年にわたり、祖国や時代すべてを凌ぐほど、豊富な食べ物で順序よく人々を歓待した。訪問客に食べ物を豊富に振舞い励ましの言葉をかけるのは、長男のサー・フランシス・ニューポートに引き継がれている。その上、祖母は正餐のあとは常に、足しげく通う大勢の貧窮民一人ひとりに、施しに必要な金額の多寡に応じて自ら手で渡したものだ。このようなご先祖様のお陰で、しかも数々の立派な縁組を繰り返して、私はタルボットやデヴァルーやグレイそしてコルベットなど貴族の後裔となっている。そのことは、現存するニューポート家が所持する立派な紋章からも窺い知ることができる。母方のご先祖様についても同様に多くを語ることができるが、予定の紙幅を超えてしまうので、私の母と兄弟姉妹について多少なりとも触れて終わりにする。母は長年にわたり父と徳高く愛情豊かに暮らしたあと、亡き父のためモントゴメリー教会に立派な墓を建てた。子供たちを立派に育て上げ、自立できるよう確かな道を選ばせた。亡き母のために、〔ジョン・〕ダン博士が簡略ながら葬送の説教を行ない、それが印刷されている^①。母の息子たちの名は、エドワード、リチャード、ウィリアム、チャールズ、ジョージ、ヘンリーそれにトマスである。娘の名は、エリザベス、マーガレットそれにフランセスである。所期の目的をその分だけ完璧に果たすこ

とができるよう、我が生涯を語るまえに、彼らについて少し述べておく。二男のリチャードは、学問・研究に勤むよう育てられたあと、低地帯に赴き長年滞在する間、数々の戦争と一騎打ちの決闘の両方において多大な名声を挙げた。それら数々の戦闘で、伝え聞くとところによると、二十四の刀傷を負ったという。その傷がもとで、ベルヘン・オブ・ソーム〔現オランダ南部の都市〕で永眠している。三男のウィリアムも同様に学問・研究に励むよう育てられたあと、デンマークの戦争に駆けつけ、そこで一騎打ちの途中、刀が折れたものの、剣の残骸で防御しながらも接近戦に持ち込み、敵対者を投げ飛ばした。仲間が割って入るまで、相手を羽交い締めにして離さなかったという。そのあと低地帯の戦争に赴き、ほどなく命を落とした。四男のチャールズはオクスフォードのニュー・コレッジのフェローになり、あらゆる方面に期待がかけられたが、夭折した。五男のジョージはとても優れた学者で、ケンブリッジ大学の代表演説者に任命されたほどだ。弟の英語の作品が一部現存しており、その手のものとしては希有なのだが、ギリシア語とラテン語で記した完璧な書き物と較べると舌足らずであり、神と人間を扱った作品ばかりである。彼は生涯とても信心深く、人々の手本であった。何年もの間〔実際は三年ほど〕、聖職禄をもらい暮らしていたソールズベリー界隈では、聖人とほぼ同格に崇められるほどであった⁽²⁾。ウェールズ出の家系的な欠陥といえるが、ジョージも気性が荒く癪癢持ちで、それでもその件を除いて彼の行為に非難される点はなかった。六男のヘンリーも他の兄弟と同じく学問・研究に勤むよう養育されたあと、近親者によってフランスに連れられ、仏語をほぼ完璧に習得した。その後、宮廷に仕え、国王の侍従となり、さらに宮廷饗宴局長に抜擢された。そこで得た資産と良縁とによって、一財産を為し本人も子孫もそれを享受している。決闘でも数々の武勇を示したが、その他の点でも同様に経験を生かし廷臣として卒がない。七男のトマスは、父親が死んで数週間後に産まれた、いわゆる忘れ形見である。トマスは、しばらく学校で養育され、ドイツ諸侯のため召集された援軍の総司令官サー・エドワード・セシル閣下のもとに小姓として送られ、特に一六一〇年ジュリヤーズ〔ドイツ名ユーリッヒ〕包囲に派遣された。その地で、トマスはことあるごとに軍のだれにもまして、先陣を切り勇姿を示した。そこから戻ってくると今度は、ジョセフ艦長の指揮のもと、東インドへ赴いた。その途中、スペイン〔事実はポルトガル〕の戦艦に遭遇し、その闘いの中で艦長は遺憾ながら命を落とした。艦長の部下は意気阻喪したが、（東インド会社の総裁サー・ジョン〔トマスの誤り〕・スミスが私に何度か語ったところによると）弟トマスは艦長の敵を討つべく敵艦を撃沈させる弔い合戦を始めようではないか、と檄を飛ばしたという。我がイギリスの護衛艦は何度も砲撃を繰り返す中、スペイン戦艦は蜂の巣になり自ら座礁し機能不全となった。その後トマスは残りの艦船とともにスラト〔インド北西部の港〕に赴き、商人に随行してムガル帝国に到着。その国で十二ヵ月ほど過ごしてから、同じ艦船で英国に戻っ

てきた。このあと、弟は海軍に入ったが、国王ジェイムズの命により、サー・ロバート・マンセル指揮のもとアルジェリアに派遣されることになった。そこでは同胞が資金に事欠き食糧にひどく困窮するはめとなり、全艦隊を救うべく多くの軍艦が散り散りになって掠奪できるかどうか試そうとしていた。弟はたまたまある船に遭遇し、その船を拿捕すると一八〇〇ポンドの値打ちがあり、それで全艦隊を壊滅から救えると思われた。トマスはまた国王の数ある軍艦の一艦でマンスフェルド伯爵〔エルンスト・フォン・マンスフェルト〕を低地帯まで護送することになった。だが、岸からさほど遠くないところで沈没の憂き目に遭い、伯爵は乗組員とともに長艇、つまり救命艇に乗り込んだ。さしあたり我が弟は航海長の手助けを決意し、長艇に乗らなかった。航海長があらゆる手段を尽くして軍艦の危機を取り除く算段をしていたからだ。しかし、沈没が必至になると、弟は最後まで躊躇していたが、長艇に乗り込むことにした。航海長は一緒に逃げるのを拒み、艦とともに沈んだ。このあと弟は皇太子〔後のチャールズ一世〕をスペインに迎えに行く艦隊の一艦を指揮した。帰国の途上で、低地帯とダンケルクの人々の間で海戦が起こった。皇太子は、御前で行なわれる戦闘が殿下の威厳を損なうものだとしてそれを許さず、自国の軍艦に両者を分かちよう命令した。そこで弟トマスが艦隊の何艦を引き連れ間に割って入り、砲撃を長らく繰り返したところ、両者ともこれを潮時だと観念した。皇太子を無事本国に連れ帰ったあと、イギリス海峡に向かう国王の軍艦に雁行するように任命された。弟はとても勇敢に何度も闘い勝利を収めた。様々な人物と一騎打ちの決闘をも行なった。時には敵対者を傷つけ武具を脱がせた。時には敵どもを潰走させた。このように数々の武勲を挙げたので、弟トマスは立派な司令官になるものと期待されたが、他の者たちが自分よりも先に昇進するのを目の当たりにして不満が募り、弟の心の内を推し量ると、己を過小評価したのであろう、隠棲して陰鬱な余生を送った。憂鬱症のもと長年暮らしたあと逝去し、ロンドンのチェアリング・クロス近く、聖マーティン教会に埋葬された。上述の次第で、私の兄弟で生き残っている者は、六男ヘンリーだけである。〔自伝を執筆し始めた一六四二年の時点〕

長女のエリザベスはアベルマルレス〔ウェールズ西部カーマゼンシア州〕のサー・ヘンリー・ジョーンズに嫁ぎ、息子ひとりと娘ふたりを儲けた。彼女の後半生は、我らが存命中に知れ渡るほど、病身ゆえ惨めなものだった。十四年も経つうちに、骨と皮にまでやつれ果て、ついにはロンドンで死んだ。チープサイド近くの某教会で永眠している。二女のマーガレットはスルーイディアルトのオーウェン・ヴォーンの一人息子で世嗣のジョン・ヴォーンに嫁いだ。この縁談によって、ハーバートとヴォーン両家の確執が緩和され和解ができた。彼女は三人の娘と世嗣の息子を儲けた。娘の名は、ドロシー、マグダレン、そしてキャサリンである。娘三人のうち、下のふたりだけが存命である。ヴォーン家の所領は男の世嗣にだけ相続された。そのやり方はそれ

ほど明確ではなく、その所領に適用された限嗣相続には疑問が残る。三女で末娘のフランセスはリンカーンシア州の士爵、サー・ジョン・ブラウンに嫁ぎ、何人かの子供を儲けた。その長子は、若くして様々な決闘を行なったが、その内のひとつの私闘で、こともあろうにランカスシア州の名家リーの身内を殺めてしまった。我が親戚一同についてさらにもっと多くのことを述べられるが、親族の生涯を詳述するのが目的ではない。記憶に基づき、精一杯精確に彼らの生涯の一部を述べたが、その素描に大きな誤りはないと確信している。さて、話を私自身に移そう。

私が産声をあげたのは、午前〔異本では午後〕の十二時から一時の間、シュロップシア州のアイトンの地（風光明媚な地所とともに、館が先述の祖母よりニューポート家に伝わる）であった。幼少の頃は病弱で、頭に下剤をかけたのではないかと見紛うほど、耳から常に膿が出ていた〔滲出性中耳炎か〕。そのせいで言葉を発するのがかなり遅く、このまま口がきけなくなるのでは、と思った者が多くいたという。思い出せる中で一番遠い昔のことは、周りで何を言っているのか解ったとき、それでも不完全か見当違いのことを言うのを怖れて口を噤んでいた時のことである。話せるようになって、発した問いで一番古いものは、どのようにしてこの世に生まれ出たかであった。この世に存在していることは自明だが、如何なる因果で、如何なる発端で、そして如何なる手だてによってか想像もつかないと、乳母や付添いなどに語ったものだ。この問いかけに、乳母や居合わせた婦人たちが笑いだし、他の者たちも不思議がった。というのも、一同の者によると、そのような問いかけをする幼児は、私が初めてだという。これに対して、もう少し成熟してから次の所見を述べたが、それがせめてもの慰めであった。つまり、分娩のとき母が被った産みの痛みや陣痛を、この世に生を受ける過程で、つまり産道を通る最中、私自身も劣らず身を感じるはずだったが、実際には微塵も悩まされることがなかった。生まれ出た時と同じようにこの世を去る時も、一切の苦悩や苦痛を感じず逝きたい。というのも、死に際して偉大なる神の恵みによって、さらに幸せな状態になれると信じているし、如何にしてこの世に登場したのか解らないのと同じように、如何にして退場するのか解らないとも確信している⁽³⁾。その時以来、この趣旨で韻文を書き綴っている。この場にそれを挿入するのが相応しかろうと思う。以下その梗概である。

生について⁽⁴⁾

そもそも、生命は、すでに豊饒なる種の中に宿っている⁽⁵⁾。そこでは造形力が天来の賜物で形の定まらぬ塊を維持・管理し、活力がみなぎる液体で満たそうと切に願っていた。そして、造形力は塊の外容を奥まった処に閉じ込めておくが、それもやがて諸力が一丸となり、根源としての種が発芽するこ

とを許され、胎児として姿・形全容が無事に整うまでのことである。

次に、母なる子宮で揺籃期を過ごす。そこでは、泡立つ生氣によって華奢な四肢が着けられ、それが伸長すると同時に、驚異の構造である感官が形成され、精神のため決して埴生^{はにゅう}どころではない立派な宿が用意される。そのためすぐにでもそれは天上より舞い降り、責務を果たすであろうし、また、行く末を暗示するかのように、無為な塊を匡正し、役立つようにするであろう。

このような次第で第三の局面を迎える。その場で極めて大きな舞台が眼前に現れ、天と地の祝祭劇場、千態万様の森羅万象が認識される。独自の運動で動き回るため、宇宙の法則や永遠不滅の原理に触れるが、それは星辰が不断の針路を巡航するのを観察するためであり、また生の理由と責務とを見極めるためでもある。そして、それは神の至高の意志を遠来より予知することを許されるのであった。一方、力の神は、驚くべきことに天空の様々な周期運動の速度を落とし、熱心に祈るとともに身をも捧げる者に対して、近寄りがたい存在ではなくなった。続いて第四の局面に入る。綺麗さっぱり垢を落とすと、精神はすぐにでも清められ、新たな希望が生じるとともに、さらに純然たるの運命を自覚し、あらゆる神にすがり付き、天より啓示を受ける。そして神意が聖なる愛に降臨する。人を欺くこの生のしるしが連綿として引き渡されるものの、ひとつの法で神と契約を結ぶことは許されない。

そして確かに、母の胎内にいたときから、この「造形力」、つまり形成力のお蔭で、すでに目や耳それにその他の感官が出来上がっていたが、それらは暗くて不快な場所に相応しい感覚というより、より善い生を意識してこの世で生じる出来事を認知し理解するのに相応しい器官であった⁽⁶⁾。それで堅く信じるのだが、この世に生を受けて以来、前述の五感が子宮内では何の役にも立たないのと同様、現世では役に立ちそうもない諸力が我が魂に賦与された。この諸力とは、希望や信仰や愛そして喜びである⁽⁷⁾。これら諸力は、この世では、儚く消滅するものには宿らず、現世で与えられる以上の素晴らしいものにまで勢力を拡張、完全で永遠かつ無限なものだけを受諾する。白状すると、これら諸力には、現世でも何らかの役割がある。だが、皆に訴えて訊くが、世俗の至福で現世の希望が叶えられると、さらにもっと優れたものを望み希求することがあるだろうか。また、自身の知恵を信頼し、あるいは他人の扶助に信を置くのであれば、危険が生じたときや困った状況の下で自身を救済するのに、地上で見出せるよりはるかに神聖で優れた力に頼らざるを得ないことがあるのだろうか。さらに、色褪せたり萎んだりすることのない地上の美、それが欺き失望させることがなければ、その美を愛でられるのではないか。さらにその上、あるものに感じる喜びが

極致にまで達していれば、それ以上のものは必要なのだろうか、また現世で与えられるものだけで事足りるのではないか。したがって、これら諸力の然るべき対象は、すでに出来^{しゅったい}しているか、あるいは少なくとも顕現しつつあるかのいずれかだが、その対象は神だけである。その神に信仰や希望それに愛を寄せて無益になることはなく、長期にわたって片想いということもない。だが、これらの議論はさておき、子供の頃の話に戻ろう。

《注》

- (1) 十七世紀イギリスの形而上派詩人の領袖で聖ポール寺院の首席説教者であったジョン・ダン^{ジョン・ダン}はマグダレン・ハーバート（夫の死後、再婚してダンヴァーズ夫人）の死を悼み、涙を流しながら葬送の説教をしたというが、『説教集』で彼女を善きサマリア人として描いている。「ダンヴァーズ夫人が施し物をしたのは、祝祭日とか行列祈祷の日ではなくて、常に善き行ないをしながら地球をめぐる、神の真の施し物分配吏である太陽そして月のように、そしてまた、神から日々の糧を受け取っていたように、そのように夫人は毎日、施し他人に分け与えていた。その役目を果たすとき、厳しく問いただせば怠け者とか浮浪者の物乞いとか呼ばれる者たちに、けっして顔を背けることがなかったけれども、まず汗を流して働きはするが、その労働によって困窮を克服できない者、あるいは生活必需品を手に入れることができない者に、絶えず目を向けた。そして彼らが流す額の汗ゆえに、あるものすべて、もし手もとになれば調達できるものはなんでも、自らの食卓に用意したワインや油でさえ、与えるのであった。」(*The Sermons of John Donne*, ed. Evelyn M. Simpons and George R. Potter [Berkeley: U of California P, 1956], VIII, 89) 我が国では『釣魚大全』で有名なウォルトンは、伝記作家でもあり『ハーバート伝』で、一六二七年七月一日にロンドンのチェルシー教会にて執り行なわれた、上記の葬送の説教に立ち会ったと記している。(Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, ed. George Saintsbury [London: Oxford UP, 1927], p. 276)
- (2) 十七世紀イギリスを代表する宗教詩人のひとりジョージ・ハーバートは、晩年の約三年間、ソールズベリー近郊の小邑ベマトンに教区牧師として赴任した。鬼塚敬一訳『ジョージ・ハーバート詩集』（南雲堂、一九八六年）；『続ジョージ・ハーバート詩集』（南雲堂、一九九七年）；山根正弘訳『田舎牧師 その人物像と信仰生活の規範』（朝日出版社、二〇一八年）参照。
- (3) 我々はどこから来てどこへ行くのか、この哲学的な探究は、ペトルルカに代表されるように、ルネサンス期に再興した普遍的な思索であった。近藤恒一訳『わが秘密』（岩波文庫、一九九六年）一五頁；『無知について』（岩波文庫、二〇一〇年）三四頁参照。その出所は、ヨハネ福音書（八：十四）「自分がどこから来た

- のか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っている。しかしあなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない」(新共同訳、以下同じ)であろう。
- (4) 本訳書の底本としたシドニー・リー編では、ラテン語の韻文が二編ここに挿入される。だが、異本のシャトルワース編にならい、前編「(人間の) 生について(哲学的探究)」のみを訳述し、後編「推測しようとするところの天上の生について」は割愛した。上記シャトルワース編の後注に収録された英語の散文訳を参照したが、重訳ではない。
- (5) ハーバート卿の哲学の根幹は、人の心は白紙(タブラ・ラサ)ではなく、すでに神により諸観念が植えられているという、生得観念である。Edward Herbert, *De Veritate*, trans. Meyrick H. Carre (1936; rpt. London: Thoemms, 1992).
- (6) 十八世紀イギリスのロレンス・スターンの奇抜な小説では、冒頭で「種」よりさらに遡って、両親が仕込む段階から話が始まるという諧謔となっている。朱牟田夏雄訳『トリストラム・シャンディ(上)』(岩波文庫、一九八三年)。
- (7) キリスト教でいう、いわゆる三元徳に喜悦を付加し、古代ギリシアの四枢要徳になぞらえたのか。I コリント信徒への手紙によると、「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(十三：十三)。アウグスティヌスは、その著『エンキリディオン』(便覧)で、ある友人の問いに答える形で「何を信じ、何を希望し、何を愛すべきか」を論じ、信・望・愛を信条とする。赤木善光訳『アウグスティヌス著作集4』神学論集(教文館、一九九五年)参照。

[附記] ウェールズの地名に関して、日本でも知られている有名なものはウェールズ語に由来するものであっても、ガイドブックなどにならい英語的な読み方を採用し、行政上の区画で郡(hundred)よりも下の村名については、地元の慣例的な読み方でカタカナ表記にした。ウェールズ語の発音については、永田喜文氏(明星大学講師/ウェールズ文学)に有益な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。